

いしづち

2023.9

SEPTEMBER

No.154



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



建築∞スポーツ

城大工「坂本家」の足跡（後編）

世界建築紀行 コルビュジエ巡礼 教会建築と芸術の融合 ロンシャン礼拝堂

1	建築αスポーツ	道上壮/VuA……①
2	城大工「坂本家」の足跡（後編）	一級建築士 野本 健……③ 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……③
3	世界建築紀行	コルビュジエ巡礼 教会建築と芸術の融合ロンシャン礼拝堂 西予支部 松山 清……⑨
4	寄稿	ヘリテージ建築を語る（建築市民講座に参加して） 松山支部 中尾 忍……⑩
5	委員会活動報告	愛媛の登録有形文化財 第5回「松山城」 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……⑭ 中四国ブロック徳島大会に参加して 青年委員会 委員長 和田 崇……⑯ 令和5年度青年・女性会員合同総会報告 女性委員会 委員長 下元 美恵……⑰
6	けんちくの輪	思い立ったら即行動 松山支部 西岡亜有美……⑱ ありがとう 感謝 八幡浜支部 林 一夫……⑲
7	お知らせ	令和5年度通常総会概要報告及び第2回理事会概要報告 事務局……⑳ 国土交通大臣賞表彰 花岡直樹さん受賞 事務局……㉑

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



表紙作者 上田 勇一 プロフィール

題：「伯方島」

伯方島はもともと、木浦村・北浦村・伊方村・有津村・叶浦村の5村からなっていた。

瀬戸内しまなみ海道があり、島の南部に西瀬戸自動車道の伯方インターチェンジがある。

海運と造船の島として知られる。

「伯方の塩」発祥の地でもある。

（資料／Wikipediaより）

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞（愛媛県建築士事務所協会主催）
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」（新潮社）の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞（東京／日動画廊）
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」收藏される
2015～17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「櫛リチエルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員／審査員

建築は、そのづくり手が、若かりし頃に熱中したスポーツと関係があるのではないかと考えている。個人競技的に建築をつくる人。団体競技的に建築をつくる人。人数、ルール、そして攻守のあり方など、様々なスポーツへの取り組み方が、建築のづくり方と比例(∞)している部分がある。

個人競技は、一人で競技するため、仲間を意識する必要はない。競技中、誰もサポートをしてくれないので、自分で考えて、自分で決めて、自分で行動しなければならない。自分一人で思いっきりプレーができて、勝っても負けても自分のせい。自分が主体となって、競技相手に向かってゆくところが大きな特徴だ。

団体競技は、仲間と一緒に競技をするため、お互いに同じプレーをイメージして、仲間に合わせた行動をする必要がある。同じ目標に向かい、お互いを励まし合い、お互いにサポートし合って、チームとしてプレーをする。勝っても負けてもチームとしての結果。チームが主体となって、競技相手に向かってゆくところが大きな特徴だ。

安藤忠雄の建築は、ボクシングだ(高校卒業後、プロボクサーとして活動)。たった一人でリングの中に放り出され、目の前の相手と殴り合い、倒すか倒されるかのどちらかだ。試合中、セコンドが声を掛けてくれたり、インターバルの際にサポートをしてくれたりもするが、所詮、一人で戦うことに変わりはない。社会というリングの中で、世の常識やクライアントの無理解と戦いながら、それでも自分の考えを押し通し、最後は、出来上がった建築が評価を受けることによって、相手をノックアウトする。

それが安藤忠雄の建築だ。



House__NK



House__CS

伊東豊雄の建築は、野球だ(高校まで野球少年)。グラウンドの中で、キャプテンを中心に9人が連帯してチームとして戦う。一人のファインプレーがチームの勝利に繋がり、一人のエラーがチームの敗北に繋がる。誰か一人が上手くても勝てるわけではなく、飛び抜けた選手がいなくても力を合わせれば勝利を手にすることができる。社会というグラウンドの中で、事務所のスタッフ全員と頭を突き合わせ膝を突き合わせ、キャプテンの判断の元、様々なアイディアを建築にまとめ、世の意見やクライアントの要望との攻守を繰り返し、9回裏が終了した時には勝利を手にしている。

それが伊東豊雄の建築だ。

妹島和世の建築は、バドミントンだ(中学は卓球。高校でバドミントン)。シングルスとダブルスがあり、自分一人で完結するか、二人で息を合わせて連携するか、2つのタイプがある。バドミントンのシャトルの初速は時速300~400キロにもなる。考えて反応するというより、見えたものに反射するという競技だ。ダブルスで戦う時には、お互いに意思疎通する暇がないので、二人の間には阿吽の呼吸が必要になる。社会というコートの中で、西沢立衛と息を合わせて、世の批判やクライアントとの相違といった目の前の課題に一瞬で反射しつつ、シャトルが相手コートに落ちるまで、ラリーを際限なく繰り返す。そして21点を先取して勝者となる。

それが妹島和世の建築だ。



西沢立衛の建築は、バスケットボールだ（高校でバスケットボール）。室内のコートで、ポイントガードを中心に5人が連帯してチームとして戦う。攻守が目まぐるしく入れ替わり、1クォーター10分間を全力で走り続ける体力と、ドリブルやパスを駆使した俊敏性とフィジカルも要求される。野球のような大人数でもなく、個人競技やペアのような少人数でもない。気心の知れた仲間が常に一体となり、走りながら仲間の位置や考えを確認し、時に目を合わせながら、時にノールックでボールを繋ぎ、相手ゴールリングにボールを叩き込み、4クォーター終了時には相手より多くの得点を上げて勝利する。社会というコートの中で、事務所の仲間と常に建築を考え続けながら、世の希望やクライアントの願望を超えるべく、フリースローの1点、ツーポイントシュートの2点、スリーポイントシュートの3点と、多彩な建築を繰り出して建築の地平を広げている。

それが西沢立衛の建築だ。

僕は、中学・高校と軟式テニスをやっていた。部活にはシングルスはなく、ダブルスのみだった。僕はさしづめ、ペアスポーツの経験者ということになる。でも、僕がやりたかったスポーツは、実はサッカーだった。



House_00



House_TN

僕が進学した八幡浜の愛宕中学校と八幡浜高等学校には、サッカー部がなかった。小学校の頃、友達と学校のグラウンドでボールを蹴っているのが楽しかった。中学校ではサッカー部に入ろうと思っていたが、愛宕中学校にはサッカー部が無かった。姉がやっていた軟式テニス部に入り、中学校の新人戦団体戦では南予大会で優勝したが、高校ではサッカーをやろうと思っていた。サッカー部のある八幡浜工業高等学校に行きたいと母に言ったところ、家から近い八幡浜高等学校じゃないと駄目だと言われ、サッカー部が無い八高でテニス部に……。

若かりし頃には、親の反対を押し切っても、自分のやりたいことをやった方がいい。過ぎ去った時間は取り戻せないし、自分のやりたかったことは、必ず将来、何らかの形で役に立つはずだからだ。もし僕がサッカーをやっていたら、今とは違った建築との関わり方をしていたのではないかな？ この年になっても、そんなことが頭をよぎってしまう。

あなたは、建築に対してどんな取り組み方をしているだろうか？ 若かりし頃に熱中したことを、もう一度思い出してみよう。体育会系だけではなく、文化系でもOKだ。自分と周りとの関係。建築に対する姿勢。社会との関わり方。自分が興味を持って熱中したことに、今の自分のベースがあるはずだ。「敵を知り己を知れば百戦危うからず」。

執筆： 一級建築士 野本 健
監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹

10代目 坂本又八郎 ■ 10th generation Matahachiro Sakamoto

明治20年（1887）

明治11年（1878）、愛媛県庁と警察本署が同じ敷地に建設された。明治20年（1887）に警察本署のドンゴロスの敷き替え等の工事を行った請求書が坂本家に保管されていた。ドンゴロスとは現代のカーペットのことであり、そういった修繕工事なども行っていたことがわかる。また、明治22年（1889）には愛媛県庁増築工事の入札にも参加している。



▲ 愛媛県庁と愛媛県警察署（引用：愛媛県史 近代 上）

この流れで明治11年の愛媛県庁の建設を坂本又八郎が手掛けたと言いたいところだが、明治13年（1880）～明治19年（1886）の文献によれば「大工 県庁御用達 坂本又次郎」の名前が確認される。

様々な資料を紐づけた結果、坂本又八郎の実父である可能性が高いものと考えられ、9代目：坂本又左衛門と10代目：坂本又八郎の間には約20年の空白の期間があり、その間を「坂本又次郎」が埋めていた可能性が非常に高いものと推察される。

「坂本又次郎」の名は「伊勢参宮講の講看板」においても確認できる。伊勢神宮への集団参拝が盛んだった頃、集団参拝は「講」が単位で道中していたそう。どの「講」も、道中で泊まる定宿を定めていて、定宿には講名を記した板の看板を置き、定宿契約のしるしとしていた。それが『参宮講看板（講社札）』である。定宿を決めるには、講の世話人が「宿取り」といって、あらかじめ宿場をまわり、契約がきまると、この看板を渡していたとされている。

この講看板は初瀬街道の阿保宿で旅籠屋を営んでいた「たわら屋」に残された伊勢参宮講の物である。講看板には、講の名称やシンボルマーク、講元や世話人の名前などを書き入れ、指定した宿屋に目印として掲げていた。

本資料は、伊予国で結成された神風講の講看板である。

講看板の裏には「明治十五年四月調之 職工 坂本又次郎」と書かれており、この講看板を坂本又次郎が製作したという意味である。

また、表面には「発起人 須之内幸次郎」の名前が書かれており、須之内幸次郎は坂本又八郎の妻である須之内チカの父親の名前である。坂本又八郎と須之内チカの結婚には双方の両親のつながりがあったものと想像できる。



▲ 伊勢参宮講の講看板 ▲

（提供：伊賀市／デジタルミュージアム秘蔵の国伊賀）

明治25年（1892）

道後湯之町役場日誌によれば明治25年9月16日に道後温泉本館改築工事の棟梁として坂本又八郎が任命されている。

明治27年（1894）

坂本又八郎が棟梁として道後温泉本館の神の湯本館を建設する。道後湯之町役場日誌によれば明治27年4月10日に落成式を執り行っている。この時の祝詞も坂本家に保管されていた。

明治29年（1896）

水天宮は慶安3年（1650）に久留米藩主の有馬忠頼により、現在の場所に遷宮された。その後、正徳元年（1711）、享和元年（1801）に改築工事を行い、現在の拝殿は明治29年（1896）に坂本又八郎が手掛けたと言われている。

明治30年（1897）

明治10年（1887）に初代管長の千家尊福により開業式が執り行われた。明治30年（1897）に社殿の建設を坂本又八郎が手掛けたと言われている。

その後、昭和20年（1945）の空襲により、焼失している。写真は、3代目管長である千家尊有による大社教松山分院記念祭祀（大正10年5月）の時の物である。

道後温泉においては養生湯の湯釜に彫る文章を千家尊福に依頼しており、明治24年12月30日にその文章が届いている。また、道後温泉には千家尊有の書も保管されており、大正10年に訪れた際にいただいた可能性が高いものと考えられる。

このように出雲大社と道後温泉は非常に深い関係があったものと考えられる。



▲ 神の湯本館小屋裏の棟札 ▲



▲ 水天宮（引用：ほとめきの街久留米）



▲ 出雲大社松山分祀（提供：出雲大社土居教会）



▲ 現在の出雲大社松山分祀

城大工「坂本家」の足跡

明治32年（1899）

熊本城主の肥後細川藩初代藩主である細川忠利公が山鹿温泉を気に入り、寛永17年（1640）に参勤交代の休憩場所として御茶屋を建設したことが、さくら湯の始まりと言われている。

明治29年（1896）に山鹿温泉の今井喜源太が道後温泉宛てに山鹿温泉の改築工事を坂本又八郎に任せたく、山鹿に出張をお願いしたいという古文書が道後温泉に保管されていた。坂本又八郎は道後温泉本館の棟梁として任命されていたため、このような文書を送付したものと思われる。

山鹿市はかつて養蚕・製糸業の盛んな地域であり、養蚕技術の伝播に尽力した者として今井喜源太夫婦の名前が挙げられ、山鹿市の養蚕業の重要な人物であったと考えられる。

その後、明治31年（1898）から坂本又八郎が棟梁として山鹿温泉の改築工事を行い、明治32年（1899）に工事が完了している。

内容は松風館という2階建ての休憩施設の建築、従来の龍の湯、御次の湯の棟はそのままにして新たに「松の湯」を建設し、松の湯（一等）、紅葉湯（二等）、さくら湯（三等）とした。松風館は建設から約3年ほど経過した明治35年（1902）に焼失している。

現在、山鹿温泉の入口には山鹿温泉碑と飲泉塔が設置されている。山鹿温泉碑の裏には「同三十一年。聘伊豫道後温泉工匠。加改修。」という文字が刻印され、坂本又八郎が山鹿温泉の改築工事を行ったことがわかる。

また、山鹿温泉で飲泉塔と呼ばれている物は道後温泉本館で見られる湯釜と大変酷似している。幅90cm、高さ170cm、道後温泉本館の



▲ 明治 32 年頃の山鹿温泉



▲ 現在の山鹿温泉



▲ 山鹿温泉碑 ▲



▲ 飲泉塔（提供：一般財団法人山鹿市地域振興公社）

修理工事に古くから携わっていた故河合勤先生も山鹿温泉を訪れ「当時浴槽に据え付けられていたものを記念にと戸外に保存してある由」と記述しており、かつては湯釜としての役割を持っており、坂本又八郎が山鹿温泉に伝えた可能性が高いものと考えられる。

坂本又八郎が棟梁として道後温泉本館の又新殿・霊の湯棟を建設する。道後湯之町役場日誌によれば明治30年6月19日に起工式、その後、明治32年8月5日に開業式を行っている。その時に坂本又八郎も祝詞を読んでいる記述が確認される。

明治34年（1901）

坂本又八郎の弔辞を詠んだ住職がいる来迎寺は浄土宗の寺院で創建時は道後温泉駅の放生池付近にあり、その後、何度も移転があり、この地には延享2年（1745）に移転されたと言われている。

明治34年10月14日に坂本又八郎は62歳で逝去した。共に道後温泉の建設に携わった湯之町初代町長の伊佐庭如矢より弔辞をもらっている。長年に渡り、道後温泉本館の建設に携わった仲であり、積もる思いもあったと考えられる。

坂本家に来迎寺住職の吊詞が保管されており、貴重な機会であるため、現代語訳を掲載させていただく。



▲ 道後温泉本館（神の湯本館と又新殿・霊の湯棟）



▲ 保存修理工事前の道後温泉本館（又新殿・霊の湯棟）



▲ 弔辞を読んだ住職の来迎寺



▲ 長健寺にある坂本又八郎の墓

お悔やみの言葉

さて、平家物語の冒頭にもございますとおり、インドにある仏教施設の鐘の音は、「すべては一定ではない、絶対ではない、変化するものである」ことを説き、そこに植えられている木の花は、「生きているものは必ず滅びる」ということを示しております。お経に、「人の命はすべて変化して自然の中にある。今日生きていても、明日は生きていないかもしれない。」とあります。ああ、お墓に付いた露が涙となり、死者が帰る場所には弔いの線香がたち込めております。ここに、謹んで、天真院巧匠居士（坂本又八郎）が亡くなられたことをお悔やみいたします。

思いますのに、彼は今や、極楽にある甘い清らかな水をたたえたすばらしい池に遊び、蓮の華の台の上において、常に変化のない仏の教を修めて自ら楽しんでおられ、わたしども念仏を行う後続の人を待っていることでしょう。

そもそも、すばらしい蘭の花は長く楽しむことができませんし、人並外れたすぐれた人は長く生きることがありません。もし、どなたかが彼の遺徳を知りたいのなら、道後温泉に行っておらんさい、空にそびえ立つ数層の楼閣は、まさにこれ、彼の偉功を示す最後のものでなくてはなりません。また、さきに白蓮講が創設されたと聞けば、みずから万難を排して浄土の教を広めようと粉骨砕身されました。これにより、京都にある浄土宗総本山知恩院の門跡養鷗徹大僧正猊下より、楽誉奏音巧匠のよき名を賜いました。

しかし今や、その人はいないのです。私は、憂いに沈まずにはおられません。そうではありません

すが、聖歌に、阿弥陀仏と唱うる人ぞたのもしき後の世までの友とおもえばとあります。

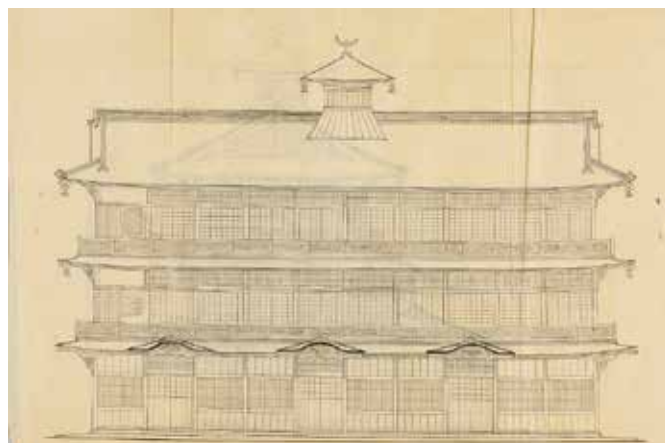
彼は、常に浄土の教を厚く信仰し、毎日の日課として「南無阿弥陀仏」ととなえ、昼夜やめることはありませんでした。難病の苦しみがひどかったのですが、身心ともにますます安らかに穏やかにし、お釈迦様のように頭を北に顔を西に、平生の念仏が臨終に際して正念となって極楽往生しますようにという、日頃からの願いを遂げたのです。

これすなわち、俗世間のわずらわしさを離れ、阿弥陀様のおこす風が吹いた所になったのです。この世での寿命六十三歳の晩秋のことでありました。

ここに、本日佳き日を選び、遺骨埋葬の式を挙げ、礼儀を正して丁寧に線香と花をお供えして、彼の冥福を祈ります。

上を向いてお願い申し上げることは、又八郎さんの魂よ、聖なる場所を超え、悪業や煩惱の苦勞をなぐさめ、仏の姿を見、仏の教を聞いて、すみやかに、迷いを超えた、悟りを開いた境地に至りますように。謹んで、あらあら申し上げます。

明治三十四年十月十六日
来迎寺住職大僧都 光誉昌運つつしみ申す



▲ 神の湯本館の図面（引用：道後湯之町役場日誌）

■あとがき

松山城を手掛けた城大工の家系「坂本又八郎」。初めて聞いた時はすごい人物が道後温泉本館に携わったんだと率直な感想を抱いた。

私自身、当時道後温泉について無知であったため、特に深い考えには至らず、まさかこのように「城大工：坂本家」について執筆するものとは全く考えてもなかった。そしていざ「坂本又八郎」について調査しようとしたところ、今まで一切調査されておらず、まとめた文献や資料が一切ないことに驚いた。

道後温泉本館の初代町長である「伊佐庭如矢」については多くの文献や調査資料があるにも関わらず、主要な人物の1人である「坂本又八郎」については、城大工の子孫程度しか記載がなかった。

また、江戸時代の大工について調査しようとすると文献がほとんどなく、数少ない資料においても「大工については日常に近いものであり、わざわざ文献等で記述しない」と記載されていることから、私と似たような境遇に陥っている研究者も存在した。

今回、「9代目：坂本又左衛門」「10代目：坂本又八郎」について初めてまとめた執筆資料である。その中で9代目と10代目の間を埋める「坂本又次郎」という人物を発見したことは大変意義深いものとする。

この執筆資料は私1人ではまとめることが困難であり、多くの方々のご協力があったためまとめられた資料である。そのため、1つしか根拠資料がないものも列記させていただいているため、今後の調査・研究次第では多くの修正等が生じるものと考えられるが、初めての資料であるため、ご容赦いただきたい。

この一連の調査でまとめたことによって見えてくるものは、坂本家は松山藩の城大工であったため、松山藩主に関わる屋敷や寺などの工事も行っ

ていたことがわかってくる。戦火によって資料が焼失していることから根拠資料を提示することは難しいが、現在残っている松山藩主と関わりのある寺などは恐らく城大工の坂本家に関わった可能性が非常に高いものと推察される。

また、愛媛県に変わった後も城大工としての実績により、愛媛県庁や道後温泉本館など主要な建物の建設に携わり、それを見た県外の人々からも建設の依頼が舞い込んできたことがわかってくる。

坂本家の伝承によれば、坂本又八郎は神の湯本館と同じ三層楼の別荘を建設し、月見や雪見の酒盛りを楽しんだ話や吊詞からも、本当に道後温泉本館の建物に思い入れがあったことが想像できる。

未来の調査・研究で多くの追記・修正がなされ「城大工：坂本家」が他にどのような建物の建設に携わったなど解明され、多くの人々に知っていただけのことを切に願い筆を置く。

■参考文献

「道後温泉 増補版」

「松山城」

「松山市立新玉小学校創立100周年記念誌」

「日本歴史地名大系第二十七巻 京都市の地名」

「東予史談 第十三号」

「愛媛県歴 近代 上」

「愛媛県警察史 第1巻」

「わすれかけの街」

「湯町やまが」

「湯の町山鹿 第4集」

「日本の神社大全 13 九州1」

「愛媛県史 人物」

「道後湯之町役場日誌」

「坂本家資料」

* 本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

✈️ コルビュジエ巡礼 教会建築と芸術の融合ロンシャン礼拝堂

西予支部 松山 清

1 フランス東部、スイス近くのロンシャン



▲ロンシャン礼拝堂にて

ロンシャン礼拝堂は正式名を“ノートルダム・デュ・オー礼拝堂”といい、教会らしからぬファサードのチャペルだが、中に立った時に感じる神聖さは背筋がピリッと伸びるような緊張感があり、世界の大聖堂を超越し芸術と信仰が融合した異次元のものを感じた。ソーヌ平野にある小さなロンシャン村のブルモーンの丘に建つこの教会は、とても不便な山の上であり、2時間に1本くらいしかない各駅停車の駅から細い山道を30分以上も徒歩で登っていかねばならなかった。隣の少し大きなリユール駅でタクシーが捕まれば楽に行けるかもと期待したが、1時間程待っても1台のタクシーも来ない。仕方なく一駅のみ列車で長い距離を走り、やっとロンシャン駅に着いた。

ロンシャン礼拝堂は、20世紀に入った頃の“教会を芸術によって満ちし再生させる”という動きの中で、空爆によって倒壊したロンシャンの礼拝堂を復活させるのに、神父らが「ル・コルビュジエは今日の宗教建築に息吹を吹き込むことが出来る唯一の建築家だ」として設計を依頼した。コルビュジエは精神性を宿す建築に心引かれ、宗派の枠を越えて祈りの場を創造するという信念で礼拝堂の建築に取り組んだ。

2 パリ・リヨン駅からロンシャン礼拝堂を目指す



▲ミュールズ駅のTGV



▲ロンシャン駅

令和5年1月29日(日)午前9時17分パリ発のTGVでスイス国境の町ミュールズを目指した。ロンシャンはフランスのどの辺りなのか全く検討がつかなかったが、フランス国鉄の切符購入アプリomioで検索すると、その経路と列車の時刻がバッチ表示された。ヨーロッパの鉄道は網の目のように路線が張り巡らされているので理解しづらいが、まずは東のミュールズまでTGVで行き、そこから在来線快速でリユールまで引き返し、さらにスイス方向へ1駅引き返すという、行ったり来たり複雑な行程だった。それはローカル線を走る列車の本数が少なく、2～3時間に1本の各駅停車でないとロンシャンに停車しないためだ。ネットの威力でTGVとRE Rのチケットを購入することが出来たのだが、その行程を理解するのに少々時間を要した。

パリ・リヨン駅はスイスや地中海のマルセイユ方面へのTGV発着駅となっており、ホームも地上・地下十数本ある大きな駅だ。ミュールズへ行く列車は地上ホームから出発するが、発車時刻の15分程前にならないとホームの番線が表示板にでない。ヨーロッパはそのようなシステムが多く乗客は改札前でホームの番号がわかるのを待っていて、表示されてから一斉に改札へ向かう。その待ち時間に朝食のジュースやパンをキオスクで買入してTGVに乗り込んだ。

パリ・リヨン駅から少し走り郊外へ出ると、そこか



▲礼拝堂への上りの山道



▲坂道の先の礼拝堂

らは延々と北海道のような広大な草原や畑が続く。景色は移り変わるのだが、さほど違った光景が展開するわけでもなく、農地や牧草地が連続し、やがて町が現れそれを繰り返す。欧州の大地はそのような印象で、大地がゆるやかにうねっているが山があまりない。TGVは特急宇和海のように揺れることなくスムーズに滑るように大地を走り続けた。

ミュールズまでのTGVは2階建て2編成が連結しており、座席は長い列車の1等席が指定されていた。通路を挟んで2席と1席の配置で、2階の窓側の一人掛けの席だったので展望も楽しめた。ミュールズから乗り換えた快速列車は座席指定ではなかったが、1等席と2等席があった。車掌は料金を支払わず1等席に座っている乗客をしきりに2等席へと追い払っていた。快速列車はリユールまでで、そこで降りて各駅停車に乗り換えた。

リユールで各駅停車の列車を待っていると、日本人らしき若い女性二人組を発見。この二人もロンシャン礼拝堂へ行くんだと直感し、付いていけば礼拝所にとどり着くに違いないと勝手に少し安心した。二人組もロンシャンで下車。ところが駅からなかなか出発しない。仕方なく駅の坂道を一旦町まで下り、山の上の礼拝堂まで約2kmの道のりを歩いて登った。標高差150m程はありキツくて汗がでてきた。どうやら二人組は自分の後を着いてきているようだっ



▲東面・屋外礼拝所

た。企ては失敗し、逆にこっちが利用されてしまった。何度か早く歩いて引き離そうとしてもさすがに二人は若い。おしゃべりをしながら離れずにピッタリとついてきている。後で、東京から来た、設計事務所でインターンシップ中の学生であることがわかった。パリではサヴォア邸にも行ったらしい。礼拝堂をバックにシャッターを切ってもらった。

3 山頂に建つロンシャン礼拝堂



▲無数の窓のあるファサード（南面） チケット売り場とショップのある建物を出て、坂道を上ると、漫画“おそ松くん”の頭のような礼拝堂の屋根が見えてきた。この大きなコンクリート製の屋根は随分と重そうなのだが、中は飛行機の翼のように中空の構造である。平野から山の上に礼拝堂が見えるかと期待していたが、列車で来たため確認できなかった。尖った屋根は船のような印象を受ける。

南面の無数の窓が配置された壁は太陽の光を浴びて白く輝いていた。この窓から光が内部へと降り注ぎ、不思議で神聖な空間の演出をしていた。

東面へ回ると、そこは外部礼拝所となっており十字架や説教台などが準備されている。舳先近くに縦のスリットが入り、下部が出入口でもあった。また北面の出入口は、建物の耳のように高く伸びた二つの塔（足場で囲まれていたが）に挟まれた縦スリットの下部に取り付けられていた。さらに北面は木製



▲内部から見た南面外壁



▲ 改修中の北面

の塀が並んでいたの、「これは何だろう?」と思ったが、教会の裏側でもあり、外壁改修
 工事中だった。木製の壁は工事のための仮囲いだったのである。環境に配慮してあるためなのだが、その仮囲いも自然木を使っているのでも新しく壁を作ったのかと勘違いしてしまった。

礼拝堂には塔が3つあって、それは耳のような役割を果たしている。教会では高い塔があってそこが鐘楼であったりするが、ここでは鐘ではなく光を内部へ取り入れる天窓のような機能を有していた。その下部には小礼拝堂が設けてあった。周辺の音や人々の祈りを耳で聞いているような気がした。しかし、それは内部の音響を高める効果もあった。

さらに西面には鐘が3つ設置してあり、教会の塔に鐘楼がない分、地面に3つの鐘が設置されていた。その内大きい2つは1092年にこの地に建てられた古い教会のものだそうだ。

礼拝堂の外周を一回りして、その中に立った。正面入口はエナメルで装飾された回転扉になっている。教会は入口から入ったら正面奥に主祭壇が配置されている場合が多いが、ここは右側の船の先端部のような方向に主祭壇があった。その他、建物の耳のような3つの塔の下の小礼拝室は、暗い室内において

その上部の天窓からの光が降り注ぎそこだけスポットライトが当たっているようだった。



▲ 光が降り注ぐ小礼拝室



▲ 鐘塔



▲ 北面出入口内部

主祭壇の反対側後方には、告白をするための告解場とその左右が小礼拝室という配置である。

この礼拝堂で特筆することは南面外壁の窓から差し込む様々な色の光と音響だ。この特徴的な窓は奥行きが2m程あって、壁にくさびを突き刺したように先に行くほど細く小さくなっている。そこにはコルビュジエが絵や文字を画いていて、ステンドグラスから多彩な色の光が差し込んで、内部を不思議な空間に醸し出していた。窓自体は大きくないので礼



▲ ホール正面側の聖歌隊と会衆席

拝堂内はとても暗く感じるが、それぞれの形の異なる小窓から差し込む光がとても幻想的だ。また屋根と壁のスリットからも光が差し込み、屋根が軽やかな感じがする。この手法は後世の建築家も取り入れており、コルビュジエの遺言のようなものだ。

主祭壇の右上の窓には聖母マリア像が置かれてい



▲ 正面入口の回転扉



▲ 主祭壇から見た後方・告解場



▲ 南面の窓



▲ 厚い壁のクサビ型の窓



▲主祭壇とマリア像のある窓（右上）



▲説教壇



▲サンクレア修道院

て、外部で礼拝する際には像を回転して外を向ける仕組みも面白い。主祭壇左には説教壇もあり、ミサでは神父がここに立ち会衆を前に説教するシーンを想像した。

聖堂内にはそれ程多くの人がいたわけではないが、シスターが一人で賛美歌を歌われていて、その声が響き渡っていた。音響効果も十分に考えられた造りとなっている。礼拝堂の直ぐ下にはレンゾピアノ設計のサンクレア修道院があった。

その他、礼拝堂の周辺にはいくつかの施設があり、コルビュジエ設計の“神父の家”、“ゲストハウス”も見学した。修道院はあまりにも近代的な建物だったため、これが修道院だとは思えなかった。公開されていなかったが、ガラス張りの縫製工場のような内部だったのだが、そこで作業をしていたのが修道女の方だと思われた。

4 帰路

帰りはベルフォルト行きの各停の列車に遅れないよう、礼拝堂のある山頂から早足でもと来た道を下って行った。少し歩いた頃、後ろから来た老夫婦の車が止まってくれた。うれしい！ 乗せてくれるというのだ。お二人とも日本人と会うのは初めてらしい。



▲ゲストハウス



▲神父の家

自分たちもベルフォルトへ行くのでそこまで乗っていくよう強く勧められたが、列車の乗り換えもあるのでロンシャンから列車で向かうと説明して、丁寧にお断りした。長い下り坂を歩かずに済んで助かった。

ローカル線のRERでベルフォルトからTGV乗り換え駅のMEROX駅に着く直前、キャリーバックを引いた黒人の二十歳くらいの女性に、「次はMEROX駅ですか？」と訪ねられた。「こっちが聞きたいわ！」と言いたところだったが、ほぼ確信していたので「そうですよ。TGVに乗り換えるんですね？」と知った振りをして答えると、彼女は張り裂けそうな満面の笑みで「ウィ！！」と明るく返してくれた。それだけでなんとなくこちらまで元氣をもらった気になった。列車の乗り換えは常に不安が付きまとうが、きっと彼女も安心できたに違いない。

5 訪問がかなったロンシャン礼拝堂

ル・コルビュジエの最高傑作であるロンシャン礼拝堂を訪ねることは、建築教室で西洋建築を知ってから1つのマイルストーンであった。実現できたのは2つの要因がある。1番目にはマイレージプログラム参加によってパリまでの移動コストをほぼ気にする必要がないこと、2番目は列車のチケットが国内で予約可能となり、切符はスマホのスクリーンショットが国際的に利用可能となったことだ。これらを使いこなすことが鍵だった。

ロンシャン礼拝堂は教会建築とはかけ離れた教会造型芸術であり、平面図を見ても実際の姿は想像もつかないような、3次元的に生命を吹き込まれたある種の生物のように思えた。コルビュジエに設計を依頼した神父の祈りが、今の時代にまで伝わっているようだった。

ヘリテージ建築を語る (建築市民講座に参加して)

松山支部 中尾 忍



▲ 第1回建築市民講座の様子（4/22開催）

4/22(土)に木子七郎研究者の武知亜耶先生、萬翠荘等、県内の文化財に詳しい花岡直樹先生をお招きし、第1回ヘリテージ建築を語る「木子七郎の建築と愛媛」という建築市民講座が開催されました。

昨年、萬翠荘が竣工100周年を迎え、今年は木子氏が校舎を設計した松山大学が100周年（校舎は1年遅れで完成したので、来年が100周年：現存せず）ですが、若い建築関係の方に県内の歴史的・文化的価値を保有する建築や歴史、建築技術者について興味を持って頂き、持続可能なまちづくりや建築技術者の育成が地域で継続的にできるように、建築についてより関心を持ってもらうための開催でした（今年度は3回開催予定）。



▲ 館長室で図面を確認している様子

県外の木子建築をもっと詳しく知って頂くために、県外の木子七郎の作品写真を可能な範囲で展示、今回は現存する京都市左京区にある関西日仏学館の館長（総領事ジュール・イルマン氏）にも協力して頂き、建物の撮影、原図をお借りし、写真パネルと資料の展示でした。新潟・福井・長野に建築視察の予定があったので、その時の参加者の皆様（建築士会の会員の笹木篤氏、白方賢吾氏、写真家の北村徹氏）と訪問、取材させて頂きました。

ご存知の方が多いと思いますが、木子七郎氏は1884年(明治17年)4月30日生、萬翠荘竣工時(1922年〔大正11年〕11月25日)は38才、県庁竣工時(1929年〔昭和4年〕)は45才という比較的若い時期に新田長次郎氏とのご縁で愛媛に建築を設計し始めました。研究者の武知亜耶氏によると生涯で設計した建築物は300以上あったのではとのことでしたが、現存するのは県内外で15箇所とのことで、県内に残る、萬翠荘、愛媛県庁、石崎汽船、鍵谷カナ頌巧堂は大正期～昭和の前半の様式建築の流れを知ることができる建築として全国的にも貴重な文化財と言えますので、若い方や一般の方にも広い視点で見て頂くと、歴史的文化的な価値がよりわかりやすいのではないかと考えています。少しですが、関西日仏学館の写真（北村徹氏提供）を掲載させていただきます。



▲ 現在の関西日仏学館のファサード

今回のイベントは学生、建築関係の仕事をしている若い方、一般の方向けの建築市民講座の開催でした。減少しつつある、建築士の技術者の育成、建築に関心を持ってもらう活動、各建築団体の会員増強の活動が共通事項として、大切なのではないかと建築5団体会長会議懇話会で議題になり、今回、研究者の武知亜耶先生、花岡直樹先生に講師としてご協力頂きました。主催：(公社)日本建築家協会四国支部愛媛地域会、共催：松山市、(公社)愛媛県建築士会、(一社)日本建築学会四国支部愛媛支所、(一社)愛媛県建築士事務所協会、(一社)愛媛県建設業協会建築部会の共同で令和5年度に3回にわたり開催予定です。現在、安藤忠雄展が開催されている、坂の上の雲ミュージアムにて開催することになりました。ご協力いただきました、関係者の皆様、ありがとうございました。11月4日(第3回)の「ヘリテージ建築を語る」も、坂の上の雲ミュージアムにて開催されますので、是非ご参加ください。

愛媛の登録有形文化財 第5回「松山城」

文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹

今回の登録有形文化財は、松山城の昭和の復元の建築についてご紹介したいと思います。まず、松山城の建築の歴史について少し触れてみます。慶長7年(1602)松山藩初代藩主の加藤嘉明によって築城が開始され、約20年の歳月をかけて完成された名城です。天守廻りは本壇と呼ばれていますが、これは寛永12年(1635)に松平初代藩主となった定行により整備され、現在の三層の天守ができたといわれています。

その後、徳川幕府の安定政権により戦闘に使われることなく明治維新を迎えました。しかし人災以外に大きな「火災」という敵がありました。①**天明4年(1784)元旦の落雷により、本壇一帯の建物を焼失**します。その後68年の歳月をかけて本壇の建物が嘉永5年(1852)に復元されました。これは明治維新のわずか16年前のことで、江戸時代以前に建てられた天守、いわゆる現存12天守の中では松山城天守が最新の建物として注目されています。写真①は明治時代に撮影された貴重な写真です。



▲写真① 明治時代の松山城（松山市子規記念博物館蔵）

こうして苦勞して復元された本壇の建物も、②**昭和8年(1933)に放火により小天守より西の部分が消失**してしまいます。（写真②）



▲写真② 放火により本壇の西半分を焼失（松山市提供）

そして、③**昭和20年(1945)、第二次世界大戦の空襲で太鼓門、太鼓櫓一帯と乾門を焼失**します。この時に天守が焼け残ったことは奇跡的でした。さらに④**昭和24年(1949)にまたまた放火で筒井門を焼失**します。この時も隣接する、築城当初の建物といわれる隠門まで延焼しなかったことは幸運でした。

天明の落雷で焼失した天守ほか本壇廻りの建物の復元は、もしかしたら幕末期には必要でなかったかもしれませんが、松山藩のシンボルを再建、という心意気が感じられます。これと同様の信念で松山市は昭和43年(1968)本壇西の建物から始め、本丸の建物を次々に復元していきます。しかもそれは、既存の江戸時代の建物や、昭和初期の調査による資料を基に、木造で、材料や工法もそれらに倣って復元しました。（写真③～⑥）そして、昭和61年の巽櫓まで続き、これにより渡堀や一部の櫓を除き、「築城当初の建物」、「天明の落雷以降の江戸後期に復元された建物」、「昭和に復元された建物」と、時代は概ね3期にわたりますが、**松山城の本丸はほぼ江戸時代の姿を取り戻している**、ということがいえます。これは全国的にも例がなく、松山市民、愛媛県民が胸を張って自慢できることと思います。



▲写真③ 筒井門続櫓（復元）の小屋組の様子



▲写真④ 同内部の様子



▲写真⑤ 乾櫓（江戸期）の小屋組の様子



▲写真⑥ 同内部の様子

ここで、国の文化財の登録制度について、目的や条件を整理しておきます。近代の建造物を中心とする文化財建造物を後世に幅広く継承していくため、自由に活用しながら保存する制度で、従来の指定制度（重要なものを厳選し許可制等の強い規制と手厚い保護を行うもの）を補うものです。登録の基準は、**原則として建設後50年を経たもののうち、①国土の景観に寄与しているもの、②造形の規範になっているもの、③再現することが容易でないもの、**となっています。所有者を始め、関係者皆が大切な建物であることを認識し、少しでも多く後世に残すことができるようにするための制度と考えるといいかもしれません。

指定文化財とは違い、必要経費の多くを占める保存修理工事費の補助はありませんが、保存・活用のための修理の設計・監理料の2分の1を国が補助、敷地の地価税を2分の1に減税、市町村が家屋の固定資産税2分の1以内を適宜軽減などの優遇措置があります。

ご承知の通り、松山城の江戸期に建てられた建物は、天守閣を始め21棟すべてが国の重要文化財に指定されていますが、昭和の木造での復元で最初の昭和43年に完成した、本壇西側の建物群の①小天守、②南隅櫓、③北隅櫓、④玄関多間櫓、⑤玄関、⑥十間廊下、⑦多門櫓、⑧筋

鉄門、⑨内門の9棟が、築50年を迎えた時点で松山市が登録申請し、令和元年9月に登録ができませんでした。先ほどの基準の「国土の景観に寄与しているもの」、に該当します。（写真⑦⑧）

続いて昭和46年に完成した、①筒井門、②筒井門東続櫓、③筒井門西続櫓の3棟も、令和4年6月に同様の名目で登録が完了しています。（写真⑨）



▲写真⑦ 小天守（手前）と南隅櫓



▲写真⑧ 玄関（唐破風）と北隅櫓、十間廊下（左）玄関多間櫓



▲写真⑨ 筒井門、同東続櫓、同西続櫓

今後も松山城の復元建物のうち、築50年を迎えるものがあります。同様に登録申請されることを期待したいと思います。松山城の建物が皆で大切に保存され、後世に伝えられることを願ってやみません。

中四国ブロック徳島大会に参加して

青年委員会 委員長 和田 崇

開催日：令和5年6月10日

会 場：徳島県藍住町総合文化ホール

参加者：現地30人 WEB1人

6月10日、11日の2日間、徳島県藍住町総合文化ホールにて青年・女性建築士の集い中四国ブロック徳島大会が開催されました。

愛媛からは30名が参加、そのうち24名の方が貸し切りバスでの参加となりました。バスツアーでは毎回宇和島支部の二宮青年副委員長の名バスガイドぶりが評判なのですが、今回はなんと前日の夜にコロナ感染が発覚し、急遽不参加となりました。この危機を女性会員の田中さんはじめ、宇和島支部の方々が協力して添乗員をつとめていただき事なきを得ました。宇和島支部のみなさん、ありがとうございました。



▲会場前 集合写真

私の青年委員長の任期の最後の年となるため、これまでお世話になった青年委員会の先輩方にもお声がけしたところ、みなさんに快諾いただき、懐かしいお顔を見ることが出来ました(青陽・元青年委員長は現地で落とし物をするというトラブルに見舞われましたが、これも旅の思い出です！)。先輩方、ご参加ありがとうございました。

無事、徳島に到着し、大会に参加。地域実践活動発表会は新居浜支部の政石さん、西条支部の高木さんが愛媛県代表です。今大会は各県の発表のあと、各県の発表者が経済学者の成田悠輔さんを交えての座談会をする、という新たな試みがありました。成田さんは事前に一切の情報を入れることなくこの座談会に臨んだそうで、即興

の質疑応答などもあり司会者・登壇者のみなさんは大変苦労されている様子でした。客席から見ていてもどこに着地するのか見えないハラハラの座談会でした。

前年度松山支部の大内さんが全国制覇を達成し、ディフェンディングチャンピオンとして迎えた今大会。本番に向けて住宅センターさんのミーティングルームをお借りして何度も練習をしました。結果は残念ながら僅差の3位。発表者の政石さんにはプレゼン用パワーポイント資料の作成、展示用のポスター制作、原稿を暗記するように強要……全て押し付けてしまいました。政石さんからは鬼と呼ばれましたが、これも良い思い出になると思います！

懇親会では受付で法被を手渡され、嫌な予感がしていたのですが、案の定余興タイムにステージ上で阿波おどりをさせられることに……数分だったはずですが、思った以上にハードで最終的にはランナーズ・ハイならぬアフオドリーズ・ハイのような状態でした。今後はプロフィールの趣味・特技の欄に「阿波おどり」と書きたいと思います。

翌日は理事会組とエクスカッション組に分かれての行動。あっという間の2日間でした。

やっぱりバスツアーは楽しいです。次年度からも出来れば継続してもらいたいです。

みなさん、大変お疲れさまでした。

(二宮副委員長はコロナ陽性だったものの無症状だったそうです)



▲懇親会

令和5年度青年・女性会員合同総会 報告

女性委員会 委員長 下元 美恵

開催日：令和5年7月15日(土) 17:15～

場所：久保豊2番町ビル

参加人数：尾藤会長

花岡担当副会長

和田青年委員長

下元女性委員長

青年会員 8人

女性会員 8人

上記日程にて、今年度初めて、青年・女性会員合同総会を開催し、本年度も、尾藤会長、花岡担当副会長にもお忙しい中ご参加頂き、終始和やかに開催することが出来ました。

さて、合同総会？と驚きの方もいらっしゃるかと思います。

昨今、建築士会会員が減少していく中、今後の青年・女性会員の活動がさらに発展していくために、何が大事だろうか？ 何をすればよいのか？ と考え、まずは今以上に、お互いを知り、活動を知る事が大事なのではないかという思いから、

1. コロナ禍で希薄となった会員相互の交流
2. 活動内容についてお互い理解を深め、協力体制を整える
3. 来年度の若手建築（志）士交流会の準備のため若手建築士同士の交流の機会を作る

を念頭に総会を開催し、令和4年度の事業報告・収支決算、今年度の事業予定と予算について審議、全会一致で承認いただきました。以下にご報告させていただきます。

(1) 令和4年度 事業報告 (抜粋)

・青年委員会

8月 2級建築士設計製図実例見学会 5人参加

10月 8月開催見学会をYoutube動画にアップ

11月 ソフトバレー大会開催 (内子町)

74人参加

2月 とびだせ建築士in

東予高校【橋を作ろう】 21人参加

2月 創立70周年記念講演会

「伊礼智講演会」 139人参加

・女性委員会

8月 防災勉強会 20人参加

11月 南予見学会(宇和島市) 13名参加

12月 暮らし+ (プラス) 勉強会 12名参加

2月 創立70周年記念講演会

「伊礼智講演会」 139人参加

(2) 令和5年度 事業予定 (抜粋)

・青年委員会

8月 1・2級建築士設計製図対策勉強会

11月4日 ソフトバレー大会開催(東予)

その他予定

・飛び出せ建築士

・技術講演会

・女性委員会

9月頃 異業種勉強会 防災について

11月12日 東予見学会 (四国中央市)

紙の町建物見学会を計画中

古今荘の見学など

その他予定

・暮らし+ (プラス) 勉強会

・スキルアップセミナー

以上がご報告となります。

今回の試みにより、青年・女性委員会がさらなる発展の第一歩を踏み出し、会員の皆様が楽しめる活動をしていきたいと考えております。ぜひ、委員会活動にご参加くださいますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、日ごろから青年・女性委員会の活動にご理解・ご協力を頂いている皆様、ありがとうございます。引き続きよろしくお願い申し上げます。

思い立ったら即行動

松山支部 西岡 亜有美

花房那樹さんよりバトンを受け取りました、新企画設計棟の西岡と申します。

私が建築の道を進むきっかけは何だっただろうと思ひ起こしてみると、始まりにあるのは大学2回生の夏頃に参加した、とある不動産会社が開催した「(仮称) アパートリノベーション計画ツアー」でした。

そのころ私は地元を離れ初めての一人暮らしにやっと慣れてきた頃で、地元では到底叶えられなかった「歩いてコンビニに買い物へ行く」や「学校帰りに買い食いし放題」の楽しさに夢中になっておりました。(ちなみに私の実家は最寄りのコンビニまで車で30分の距離でした)



▲ 地元の風景 (猪や猿、兎、栗鼠、梟にも出会えます)

そんな中、友人の一人から誘われたのが前述のツアーでした。不動産会社と建築士が協力して学生向けのアパートをリノベーションするために、現役の学生たちに意見を聞くために参加できる学生を募集しているということだったので、元々ポスティングされている間取り図を見たりすることが好きだった私は、2つ返事で参加を決定したのでした。

当日は不動産会社の営業担当者さんが1名、1級建築士の方が1名、私含む学生が3名でアパート巡りを行いました。大学近くにある物件へ連れて行っていただき、怖いもの知らずな年代だった私たちは、あまり内容は覚えておりませんが、とにかく言いたい放題遠慮なくしゃべらせていただいたと記憶しています。それでも真剣に話を耳を傾けてくれた営業さんと建築士さんがいてくれた

おかげで、「建築っておもしろそう」と思うきっかけとなったことは間違いありません。

卒業後は全く畑違いの業種に就職しましたが、周りが転職を考え始めた就職3年目の冬、あることがきっかけで建築の職業訓練があることを知り、やっぱり建築をやりたい！と勢いのままに転職を決めました。それから紆余曲折を経て、なんとか2級建築士免許を取得するに至り、建築の道を歩んでいくこととなりました。

現在は新企画設計棟にて、電気設備の設計に従事させていただいております。わからないことだらけで学ぶことばかりの毎日に忙殺されながらも、自分が関わった建物が平面から立体になり、形あるものとして存在が生まれいく過程がとても面白く、この仕事をやってみたいと思った昔の私に感謝かなと、ふと思いました。きっかけはどこに落ちているかわからないけれど、見つけたときに飛び込む勇気がなければ始まりにすらならないと改めて感じたので、何事も興味を持ったなら突進するスタンスはこれからも続けていきたいなと思います。厄年はなんとか無事終わったので、程よく落ち着きと余裕も備えながら、楽しい大人の人生を目指したいです。

最近3匹の愛らしい猫を家族にお迎えして、かわいいの連続に悶える毎日の中、たくさんの癒しを与えてもらっています。生まれはそれぞれ別の子達ですが、本当の兄弟のように仲の良い姿がとにかくかわいいです。見せびらかしたい欲求が強すぎるので、もしお時間ある方はぜひとも猫談議にお付き合いいただけましたら幸いです。

最後までお付き合いいただきありがとうございました。次回は東建設の東さんへバトンを繋ぎます。宜しくお願い致します。



▲ 我が家のお猫様。左からこむぎ、こめこ、もちこです

ありがとう 感謝

八幡浜支部 林 一夫

八幡浜支部副支部長の藤川さんからバトンを受け取りました八幡浜支部の林です。5月末にあった某説明会後に「まことに難しいお願いですけど原稿書いていただけませんか」との一言に、心の中では「投稿拒否状態」でしたが、「いいですよ」と即答をしました。というのも、3月末で八幡浜市役所を退職して、この4月から愛媛県建設業協会八幡浜支部の事務局長として再就職させていただいた縁もあり、建設業協会の藤川支部長からの依頼を断るという選択肢はありませんでした。

記憶が正しければ、還暦になる前の平成29年2月の年男・年女の抱負が「いしづち」への最後の投稿だったと思います。建築士会に入会して早いもので43年経過しました。昭和59年からの10年間支部事務局長、平成28年から2期4年間八幡浜支部長を歴任しましたが、主に支部活動が中心で県本部活動にあまり貢献できなかった事に対して反省をしております。

それでも、平成29年度に会費値上げによる会員減少が懸念される中、支部会員減少幅を最小限に抑えられた事や、平成30年度総会決議により新会館建設に向けてスタートした時に、寄付金・貸付金等の問題を支部会員からの賛同を得て、ご協力頂いた事に対して改めて感謝すると共に、微力ではありますが貢献できたのではないかと思います。

令和元年5月に新会館が予定通り竣工する事が出来たのは、ひとえに歴代会長をはじめ大西元事務局長他関係者のご尽力の賜物だと考えております。

私は昭和51年に松山工業高校を卒業して、八幡浜市役所に入所してから47年間、「公務員の鏡」として大過なく職責を果たすことが出来ましたが、自分では「公務員の鏡やけどくもつとるで」と口癖のように言っておりました。マイペースで人見知りの性格であるため、他人からは「とつつきにくい性格」に見られますが、お酒が入ると「酒席専門員」となるのでよく「別人28号」と言われることがありました。そこで誕生したのが「林語録＝30」でした。

お笑いに目覚めたのが、高校3年の卒業間近。担任から「一人ずつ卒業にあたって何か一言」と言われたので、ちょうど長嶋茂雄元監督が現役引退した時期で、その伝説のスピーチを引用して「わが松山工業の建築科は永久に不滅です」と言ったら大爆笑。以来、ことあるごとに「つまらないダジャレをとばす人間」となったのでした。

漫才はナイツ、落語は笑点に出演している林家木久扇が師匠で、建設課在籍時に日替わりで進行する朝礼での

一言で見事に「座布団10枚」を獲得したのです。そして還暦を兼ねての退職祝いの席上で「林家一扇」と名の入った座布団が贈呈されたのを昨日の事のように覚えています。



▲退職祝いに贈呈された座布団

その1年後に建設課都市デザイン室から財政課契約検査室長に初異動になった時に、送別会の席上で感想を求められたので、「建築技師として完走したかったです。今日は緊張して唇が乾燥しております」と返答した記憶もあります。財政課での飲み会では「林さんはどれくらい人見知りするのですか」と質問されたので、「今年62シャイです」と相手の反応を楽しむように答えたものです。

私は昭和32年生まれで、昭和で30年、平成で30年、令和で30年というのを当面の目標として日々健康に留意しております。50歳になったのを機に15年間ほぼ毎日1時間程度ウォーキングをしております。「その日のストレスはその日のうちに解消する」をモットーにして街並みウォッチングをしていると、知らなかった建物等の新たな発見も出来て新鮮な気分になります。

標題は今一番好きな言葉であり、カラオケでもよく歌っている「ありがとう感謝」です。「林さんは退職する時に最後に何歌うのですか？」と聞かれたので、「24時間テレビのテーマ曲を歌って市役所をサライ」。

お後がよろしいようで……………。

ダジャレ歴50年の私も9月で66シャイとなり、高齢者の仲間入りをしました。この辺が社会に恩返しをする機会（妻には私に恩返しをするのが先でしょと言われるが）ととらえて行政相談委員をさせていただいたり、八西松工同窓会の事務局長を23年前からさせていただいたりしております。

次回の「けんちくの輪」は、先輩の八幡浜支部長で写真が得意な杉山さんにバトンを繋ぎたいと思います。